

脱穀機が築いた 商家の富

鳥取県倉吉の歴史は古い。古代には伯耆の国の中心地、南北朝時代には打吹山に築城、近世まで鳥取・池田藩の家老が治めるなど城下町、陣屋町として栄えてきた。

町を流れる玉川沿いには、今も白壁の土蔵群が建ち並び、町なかの狭い通りには古い商家が軒を連ね、往年の面影がそのままに残されている。

平成一〇年一二月には、伝統的建物群に指定をうけた。江戸末期から明治、大正にかけて倉吉の商家を富ませたのは、回転式の脱穀機で、稲扱千刃と呼ばれたこの機械が全国の市場を独占した。町の土蔵群は今にして、その実力を伝えている。

平成一三年に環境省から「酒と醤油のかおる倉吉白壁土蔵群」の名称で、かおり風景百選に選ばれている。

ここを訪れる客の誰しもが遙かな時代のなかに誘われて、自然と土蔵のなかにと吸い込まれていく。周辺には三朝、東郷、羽合、関金など四つの温泉郷がある。ここには、年間二五〇万人が訪れ、その

経営の散歩道

白壁土蔵・赤瓦の まちづくり

日専連名誉講師 富山短期大学名誉教授
川中清司

往き来に倉吉に立ち寄る人も多い。

中心地を蔵で 復活めざす

倉吉の中心地は、時を追って変化している。

もともとの中心地は本町筋から銀座商店街に移り、さらに離れた倉吉駅周辺へと移動した。

河北地区は、レストランやおもちゃの店のチェーン店が進出し、

パイパスには大型店が点在している。こうした変化が旧市街地の商店街の勢いを削いでいった。

中心地の衰退を蔵で復活しようという運動のきっかけは、平成四

年の商業集積法で、成徳地区が調査対象となったことだった。

研究会から 三セク会社へ

さらに、その調査結果を発展させようと、翌五年一二月には、まちづくり会社の研究会を立ち上げ、七年には基本計画報告書を、八年には利用建物などの特定など具体案を作り、一〇月には市と県で「先駆的商店街にぎわい創出モデル事業」として県と市の予算八〇〇万円（二分の一補助、一二年間継続）を獲得した。

九年五月に協同組合打吹を結成。九月には第三セクターで株式会社赤瓦を設立、資本金三〇〇万円は倉吉市が五〇〇万円、商工会議所が三〇〇万円、銀行五行で五五〇万円、民間一六五〇万円を集めた（一一年に増資二回、九〇〇万円となる）。

七つの土蔵館 つぎつぎにオープン

白壁土蔵館は、まず一〇年三月に二号館がオープン。続いて五月に三号館がオープンし、今では七つの蔵が開かれています。土蔵は個人所有で会社がその運営に当たり、

テナントや直営などで営業している。

一号館は醤油の仕込蔵で、大正時代に建てられ、天井は太い梁と束柱ががっちり格子組みされている。中では農作物の味噌、醤油漬、手焼きの菓子、草木染め、緋織りなどの物産が売られている。二号館に石橋を渡って入ると、満面の笑顔で、でん腹を抱えた大きな木彫りの布袋さんが出迎えてくれて、思わずお腹を撫でてみる。横の工房では桐の下駄を作っている、木彫りのはこた人形など郷土玩具が買える。

三号館は造り酒の土蔵。ここに並ぶ竹細工は花生けや小物入れなど、その巧みに編み上げた妙技にため息がもれる。中の竹芸では竹細工の体験もできる。

四号はなくて五号館は名付けて久楽という。一階には地元の諸作家の織物や和紙の作品をはじめ、手作りの商品がそろう、二階は石臼珈琲が楽しめる。

六号館は醤油の醸造場で、明治一〇年に建った。京風の町屋造りの店内には、ぽんと良い醤油の匂いが漂う。野菜の醤油漬、しようゆアイスクリームなどが買える。各地から訪れた醤油屋やタレ

ントがサインした色紙がいっぱい貼りだしてある。

七号館は地酒元帥の本舗。近くの大岳院の境内から湧き出る名水で造った「八賢士」などの地酒が買える。里見八犬伝ゆかりの賢士の墓は、市内のその大岳院にある。八号館の二階には「打吹庵」があり、手打ちそばが食える。一階はふるさと物産館で、藍染めや和紙など地元の商品をいろいろそろえている。

豊かな歴史資源があと押し

町おこしには、歴史背景が欠か



白壁土蔵群と玉川の橋（鳥取県倉吉市）

せない。倉吉には、次のような史跡が多く、町全体がひとつの記念館といった感じだ。

大蓮寺には、建武の武将の脇屋義助や、大阪の淀屋橋を作った豪商淀屋清兵衛の墓がある。参道の小路には赤い灯籠が立ち並び、昔ながらの情緒がたぎよう。

長谷寺は室町時代の本堂と重要文化財の厨子があり、奉納された古くからの絵馬がある。

明治四一年に建てられた第三銀行倉吉支店の洋館風の建物は、国登録有形文化財として鳥取県で第一号の登録をうけている。

観光地ではなく本物の商業を

一級建築士の里見泰男さんは、倉吉市のまちづくりの初めから加わり、蔵の活用をここまで積み上げた活動家だ。最初は商工会議所の青年部のメンバーとして委員会の活動を始め、現在も、株式会社赤瓦の取締役など団体の幹部を務めている。

里見さんは、これからの目標は「観光地化した商業ではなく、地域と連携をとりながら、機能も構造も本物のお店をつくる」ことだという。

まち角で微笑みかける 仏像

三人の仏師の作品が町のあちこちに点在していて、人々に笑いを振りまいている。代表的なのが赤瓦二号館にある布袋さん。山本竜門さんが彫ったもので大きさは四ぶもある。

小林薬局の正面軒先に飾られた薬師如来は、リポビタンの瓶を持っている。元帥酒造の前には、長い丸太をくり抜いた福祿寿が笑っている。倉吉信用金庫うつぶき支店の前には、ちよつと敵めしい毘沙門天。そのほか観音さま、大黒さまなど、ざつと四三方所で彫刻が見れる。

山本さん、仲倉裕朋さん、小谷和上さんらの力作で、どの仏像も信仰対象という感じではない。抹茶臭くなく、明るさと滑稽味がある。

ふくろうや福たぬきもある。玉川べりにある一号館には、タマちゃんに因んで、ずんぐりしたアザラシの彫刻が置いてある。

この秋から始まった「福の神にあえる街スタンプラリー」では、スタンプを集めて回り、幸福おみくじをひくと景品が当たる。

ご自慢の 優良トイレ

街を歩いて驚くのは、トイレがキレイなことだ。

成徳前パークのさわやかトイレは、町屋風づくりお手洗いで、周辺のとよくマッチしている。

公衆電話や待合所などもあり、隣の池には鯉が泳ぎ、昭和六二年のグッドトイレ賞最優秀賞を受けている。児童公園のトイレは、楽しい童画が描かれていて、子どもが心地よく使える。

市では十数年前から「良いまちづくりは良いトイレから」とトイレづくりを力を入れてきた。町に来て頂いた人に、心地よいトイレを使っていたことが、もてなしの原点という。

トイレをきれいにするのは、禅の心とも言える。禅堂では便所を東司（トウス）と呼び、重要な場所の一つとしており、烏枢沙摩（ウササマ）明王という仏さまを祀る。人の嫌がる東司の掃除は、陰徳を積む大切な修行とされており、修行僧たちは競って、明王の前で清掃に励む。

そんな禅の心が、倉吉には根付いているのだと感心した。